

# 仏教儀礼

浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室 ニュースレター

本願寺茶房：亭主 天岸 浄圓・客人 梯 實圓和上〈全編〉



# 日野誕生院 — 表紙写真の解説

表紙写真は、宗祖親鸞聖人ご誕生の地、日野（京都市伏見区）にある日野誕生院です。

## ■日野家と日野の地

1173（承安3）年、親鸞聖人は日野の地にて日野家の一族・日野有範の長男としてお生まれになったと伝えられています。日野家は、撰閥家として知られる藤原北家の一流で、藤原真夏（藤原内麻呂の息子）を始祖とする一族です。

日野の地は、平安京の南に位置し、古くから天皇や公家の遊獵地であったようです（『類聚国史』など）。また、この地は日野家が伝領しており、藤原真夏から数えて8代目にあたる資業が薬師堂を建立します。一説には、これが現在の法界寺の淵源とされています（『叡岳要記』）。そして、この資業の時より、「日野」の姓を名乗るようになったとも伝えられています。

## ■日野誕生院のあゆみ

日野誕生院の淵源を探れば、江戸時代後期まで遡ります。文化年間（1804～1818）、第19代本如宗主は学僧に命じて親鸞聖人ご誕生の地と伝わる当地の調査を行い、また、法界寺との積極的な交流を持つ過程で、当寺諸堂の修復・建築に尽力されました（『日野誕生院誌』）。次いで、第20代広如宗主時世の1828（文政11）年には、誕生の地を記念し、お堂

が建立されます。これが現在の日野誕生院のもとになります。その後、1862（文久2）年には、堂宇維持のための誕生講が結成されます。

当初は親鸞聖人の父・日野有範の名にちなんで「有範堂」、または「宝物堂」と呼称されていました。幕末の動乱期を経て、第21代明如宗主時世の1874

（明治7）年には、本山において宗祖降誕会が始行され、1878（明治11）年からは「日野別堂」と称するようになります。その後、堂宇の一大改造が施工され、1931（昭和6）年の本堂完成に伴い「日野誕生院」と改称されました。

本堂は白洲の前庭を持ち、その中央には金灯籠が据えられ

ています。さらに、前庭を囲うように三方には回廊をめぐらすなど、一般の真宗寺院とは異なる様相を呈しています。これは、親鸞聖人のご誕生を記念し、お生まれになった平安時代の建築様式を取り入れているためです。このほか境内には、青蓮院にて得度を受けた9歳の頃の「親鸞聖人童形立像」やへその緒を納めたという「ゑな塚」、「産湯の井戸」などがあり、幼き日の親鸞聖人が偲ばれます。皆さんも是非、お参りください。

（研究助手 渡邊 勇祐）



回廊から望む本堂

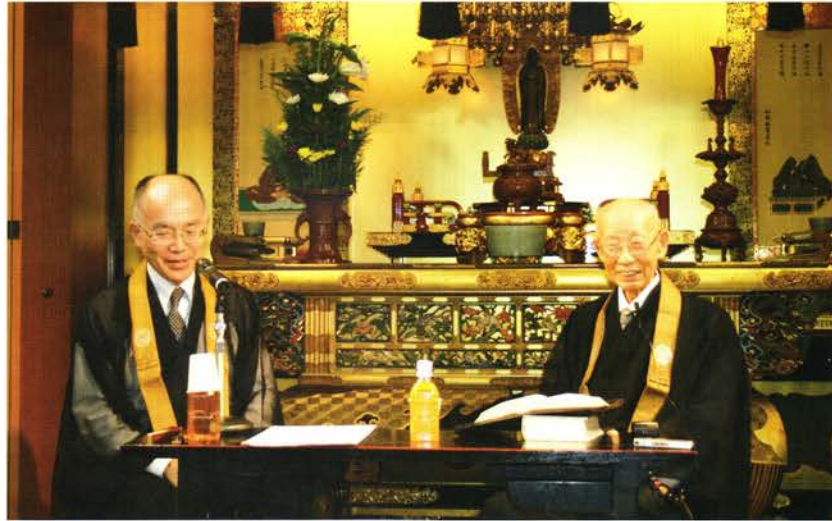
## 目次

◆日野誕生院 — 表紙写真の解説	2頁
◆本願寺茶房（第5回）— 念仏者の日にちく全編	3頁

◆葬儀“あれこれ” — 葬儀の花、喪の色について	8頁
◆行ってきました“親鸞さまの道”	12頁
◆研究室だより	16頁

本願寺茶房とは、仏教儀礼に関心を持つ亭主が、各分野より客人を招き、儀礼談義をする処です。このたびは、亭主の師でもある梯 實圓和上（本願寺派勸学・行信教校名誉校長）を、客人にお招きしました。初の師弟対談にいささか緊張気味の亭主。好評につき、前号所収の前編を再録し、後編とあわせて〈全編〉として、お届けします。

客人 梯 實圓和上  
亭主 天岸 淨圓



念仏者の  
日にち  
にち  
〈全編〉

## 前編

〈日本伝来の仏教〉

梯：仏教が日本に伝えられた当初から、念仏や読経や写経による孝養や追善供養は、仏教の中心的要素として入っていました。例えば658（齊明天皇4）年に造られた、観心寺（河内長野市）旧蔵の観音菩薩像の光背には、七世の父母たちが、死後に良い所へ往くようにと願った文が彫られています。このように、日本仏教は伝来の当初から、大陸の儒教文化と習合したものであり、亡き父母や先祖を対象とした、追善回向という死者儀礼と切り離すことのできない形で、一般的に受容されていました。

天岸：親鸞聖人は『歎異抄』第五条で、自分自身は父母孝養のための念仏を一度も申したことがない、とおっしゃっています。ここでは、従来の一般的な理解とは、真逆のことをおっしゃっていらっしゃいますが、一般の意見を切り捨てられたのでしょうか。

梯：切り離したり、切り捨てたりされたわけではないでしょうね。発想の転換をされたのだと思います。親鸞聖人は、当時一般的だった追善供養というような、あやふやな習俗を越えて、大乘仏教の本流に沿って、亡くなった方を確実に救う道を確認されたのではないのでしょうか。

追善供養をあやふやなものというのは少々荒っぽい表現ですが、ご存知のように追善回向にはさまざまな条件があります。ただし、その条件をすべて満たした回向であったとしても、相手に届く功德は、その七分の一だけといわれています。追善の功德は、願う故人にはなかなか届かないものだったようです。

天岸：それで、平安時代から鎌倉時代にかけては、生前に自分の中陰法要を自分で執り行うという「逆修法要」の風習が栄えたわけですね。

〈確実な回向の発見〉

梯：まったくその通りで、死んでから他人による善根を当てにするより、よほど確実に、死後良い所

へ行くことが約束されるだろうというのです。極めて合理的なようですが、しかし、よく考えてみるとバカバカしい話です。いつの間になくなってしまいました。



梯實圓和上

しかし、仏教の長い歴史の中で唯一、施した功德がそのまますべて相手に届けられる確実な回向がある、と確認された方がおられます。そのお方こそ、親鸞聖人なのです。詳しくは後で述べますが、その回向を「阿弥陀如来の本願力回向」といいます。

親鸞聖人以前の日本仏教では、回向した者に、その善根のほとんどが還ってくると信じられていました。しかし、本願力回向の場合、その回向をされる方は、阿弥陀如来ご自身です。

如来さまの覚りは、自他のへだてを完全に超えた「自他一如の覚り」です。その方による回向は、自分と他人を峻別して生きているような、凡夫の追善回向とは根本的にちがうのです。

じゃあ、私たちは亡くなった父や母や親しい人たちと、どう交流すればよいのか。それに応えておられるのが、『歎異抄』第五条の法語というわけです。

**天岸：**それでは、『歎異抄』のお言葉を現代語訳で拝読しておきましょう。おそらく解答は、このお言葉の中にあるでしょうから。

— 親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。というのは、命あるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人もみな救わなければならないのです。念仏が自分の力で努める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましょうが、念仏はそのようなものではありません。自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな

生を受け、どのような苦しみの中にあろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができます。このように聖人は仰せになりました—

〈一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり〉

**梯：**ここには、いわゆる孝養念仏と呼ばれている、亡き人に対する追善回向を否定する理由が、二つあげられています。

その一つは、一切の有情（生きとし生ける全てのもの）は、いくたびも繰り返してきた限りない「いのち」の流れの中で、互いに、ある時は父となり、母となり、ある時は兄弟、姉妹となりあった、懐かしい親族であると思ってみなさい。すると自分の父母を救うということは、実は、一切の有情の「いのち」を、そして悲しみを引き受けることのできる身にならねばならないことに気づくでしょう。そこからもう一度、浄土に生まれることを願う意味を再確認すべきであるといわれるのです。

そして、もう一つ大切なことは、念仏は、私のものではないということです。阿弥陀如来が、苦悩の有情を救う道として選び定め、私どもの一人ひとりに与えてくださっている、本願の念仏だということです。

阿弥陀仏は「この願いを受けいれ、これを称えて、浄土へ生まれてきなさい」との願いを込められています。それを受けいれもせずに、念仏をまるで自分が造り上げた善根功德であるかのように、我がもの顔にして父母に回向しようとすることは、身の程も知らない無知と傲慢の至りです。そこには、まことの救いのかけらもなく、親も子も、共に迷い続けるだけであるといわれるのです。

では、どうすればいいのか。そこから考え直してみよ、と仰せられているわけです。ここには、



現代人の死生観とまったく違った観点から、「いのち」の問題が突きつけられていることを知るべきでしょうな。

**天岸：**その「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」という考え方は、大変興味のある生命観ですね。これについては、後編にて伺いたいと思います。

※以上、ニューズレター14号掲載分〈前編〉。

## 後編

**天岸：**前編にて親鸞聖人が追善供養を問題とされる



亭主 天岸浄園

理由の一つとして、「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」という考え方があることをお話しくさしました。後編はその辺を更に詳しく伺いたいと思います。

### 〈仏教の生命観 — 輪廻転生 —〉

**梯：**仏教には、輪廻転生という大変おもしろい生命観が背景にあります。それも、ただ単に迷界の輪廻ということだけでなく、大乘仏教になりますと大悲利他の活動としての輪廻を語り、輪廻を通して輪廻を超える豊かな生命観が確立していたのです。

**天岸：**と言いますと —。

**梯：**古代の人びとだけではなく現代人も、死んだら終いというようなことを思っている人はほとんどいません。輪廻転生と言えばインドの思想のようですが、インドに限らず人びとは何らかのかたちで死後の世界を感じているわけです。例えば、ピラミッドや古代の古墳のような巨大な建造物は、ほとんどが死者と関わりがあるとされています。それでなければあんな巨大なものは造れないでしょう。それを説話化し、論理化して、一つの生命観として表現すれば輪廻転生という考え方になるでしょう。

**天岸：**輪廻転生なんて古いといって捨ててしまわずに、そこに生と死を連続させた生命観を見出すということですね。

**梯：**また、輪廻転生とは「万物とのいのちの一体感」をあらわす言葉で、生きとし生けるものは、みんな同じ一つの「いのち」の流れの中にあるという信念の上に成立しています。それをうまく表現すれば菩薩道になります。菩薩は生まれ変わり死に変わり、永劫にわたって修行し無辺の衆生を救い続けます。法蔵菩薩の兆載永劫の修行といっても、実は無限に輪廻しながら無数の人びとと縁を結び、その人びとを救い続けていかれたわけです。でも、あれは輪廻といわず菩薩道といいます。菩薩に死はありません。生きとし生けるすべての者を救うという菩提心を発したものは死んでおれないからです。死ねば無責任だと言われます。

このように輪廻転生の意味を慈悲によって転じますと菩薩道となるわけです。そこにはあらゆる生命の一体感があらわされています。親鸞聖人はこういう法蔵菩薩の菩薩道を通して、万物との一体感というものを育てられていたと思います。

**天岸：**『歎異抄』の第五条を読ませていただくと、唯圓房は亡き父母の孝養に責任を感じていたように思われます。多分、遺された者の責任として父母の仏事、供養を考えていたと思います。その思いを聖人は否定されたのでしょうか。そうは思えないのですが —。

**梯：**否定するというより、往生の内容として大悲還相の摂化という考えを導入することによって、輪廻転生を止揚し、往生浄土の信心を豊かにしている往生浄土は、決して夢物語ではなくります。

**天岸：**先生のお話を伺っていると、ご開山の「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず」のお言葉にも、ずいぶん深い意味がこもっているように感ぜられます。自分を生み育ててくれた父母を通して、「いのち」の連鎖を感じさせるだけでなく、父母を超えて私という存在をあらしめている、「いのち」の背景を見通しておられるように思われます。

そうすると、「父母の孝養のために」といわれ

たお言葉は、単なる否定の言葉ではなくて、極めて広い生命観を開く言葉となりますね。

〈親鸞聖人の見た「いのち」の世界〉

梯：それが「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」というお言葉でした。この言葉は『心地観経』に出てきます。このお経には、非常に深く中国の思想が入っていますので、中国で編纂されたものかもしれないと言われています。しかし仏教はインドの専売特許ではなく、中国や日本の思想や信仰と深く交渉しながら、素晴らしい思想を展開してきたところに尊い意味があると思います。

ところでこの『心地観経』を大変に高く評価されたのが源信僧都でした。その『往生要集』の第二「欣求浄土門」の中に、浄土の十楽ということがあげられ、その第六に「引接結縁楽」ということが述べられています。浄土に往生した者は此の世に生きて苦しんでいるものを救い、浄土に導くことを楽しみとするということです。そこにこの『心地観経』が引用されるのです。

天岸：どのようなことですか。

梯：「引接結縁楽」に「人の世にあるに、求むるところ、意のごとくならず。樹、静かならんと欲へども、風停まず。子、養せんと欲へども、親待たず。志、肝胆を舂くといへども、力水菽に堪へず」という言葉があるのです。「親孝行したいときには親はなし」のことわざはここから出のです。その後「君臣・師弟・妻子・朋友、一切の恩所、一切の知識、みなまたかくのごとし」。どんなに救ってあげたいと思っても、力及ばずに挫折しなければならない。それが凡夫の悲しみである。その挫折を超えさせてくれるのが浄土の世界なんだと言われるのです。

この言葉に続いて『心地観経』の偈にのたまふがごとし」といって、「世人、子のためにもろ

もろの罪を造りて、三塗に墮在して長く苦を受くれども、男女、聖にあらずして神通なければ、輪廻を見ずして報すべきこと難し」と言われているのです。親は我が子を育てるために罪を造って三塗に堕ちてゆく。地獄や餓鬼や畜生道に堕ちていく者は、みな子供のために罪を造った親たちばかりだ、そのままでもいいのか。育てていただいた子には一人一人重い責任があるぞと『心地観経』は言っているわけです。

そして「あるいは父母となり男女となり、世々生々に互いに恩あり」。親子、兄弟、夫婦となつてご恩を受け、相手の犠牲のお陰で生かされている

身を思いながら、父母への懺悔と救いを行う意味で、生きとし生けるものすべての幸せを願おうではないか。菩提心なんて言うのも難しいことになるけれども、今ここにいる一羽の鳥も、一匹の魚も、おまえを生かすために命を捨ててくれた、父たちであり母たちではないのか。そこ

に、ずっしりとした「いのち」の重みと責任感が湧いてくるわけです。

ですから親鸞聖人がここで、「一切の有情はみなもって世々生々の父母・兄弟なり」と言われたときには、ただ親しいというだけでなく、大変なご迷惑をお掛けした人たちが、私を育てるために犯した罪によって悪道の報いを受けているのだ。しかし今の私は残念ながら無力である。まずみんなを救える智慧と慈悲の力をいただくためには、どうしても浄土に往生し、さとりを完成しなければならぬというのです。

天岸：ご開山は単に否定されたのではなくて、自分の先祖だけを供養すればという従来習俗を180度転換されて、血縁関係だけでは済ますことのできない「いのち」の世界を見ておられたのですね。このような言葉と申しますか、生命観を開いてゆく契機として儀礼を考えると、その重要性が一段と深まるように思われますね。





梯 實圓 (かけし じつえん)

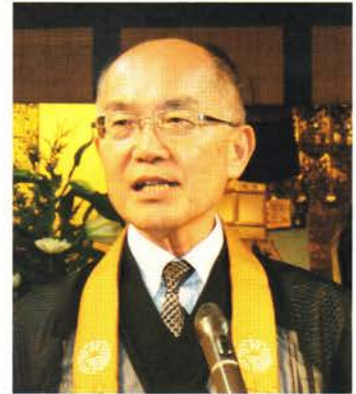
1927(昭和2)年、兵庫県生まれ。本願寺派勸学。本願寺派布教使。浄土真宗教学研究所元所長。行信教校名誉校長。浄土真宗本願寺派廣臺寺前住職。著書『教行信証の宗教構造』(法藏館)、聖典セミナー『教行信証』[教行の巻][信の巻](本願寺出版社)、他多数。

## 亭主のほっと一息

茶房での梯實圓先生との対談続編をお届けすることができました。亭主としては「ほっと一息」といったところです。

昨年は親鸞聖人の750回大遠忌法要が無事円成し、それこそ「ほっと一息」というべきところ、本願寺と本願寺派の機構改革がスタートしました。この度の大遠忌法要を機として、700回忌からの50年間をふり返り、来るべき800回大遠忌に向けての新たな出発がきられたと言うべきでしょう。機構改革の大波の中で「本願寺茶房」も、どうなることかと気の採めることでしたが、継続してゆくことが決まり、まさに「ほっと一息」の思いです。

しかしながら、さまざまな問題がめまぐるしくおこってくる中、50年先の社会のあり方を展望し、どれほど大きく変貌しているかを考えますと、この度の700回忌から750回忌までの50年間の変化を思うだけでも、想像もできない程のことになっているでしょう。それらを視野に入れながら、どのように対応していくのかを考えると、決して「ほっと」しておられる状況ではありません。心して進んでゆかなければ……。



天岸 浄圓 (あまぎし じょうえん)

1949(昭和24)年、大阪府生まれ。龍谷大学文学部真宗学科卒業。本願寺派宗学院卒業。行信教校研究科卒業。本願寺派輔教。本願寺派布教使。行信教校講師。浄土真宗本願寺派西光寺住職。著書『浄土真宗の生き方』(探究社)、『お彼岸とわたし』(本願寺出版社)、『御文章ひらがな版を読む』(本願寺出版社)、他多数。

予告

## 儀礼対談 本願寺茶房

今後も様々な客人をお迎えし、  
浄土真宗の儀礼について対談していきます。

※開催日時、テーマ等の詳細は、  
ウェブサイト・本願寺新報等にてお知らせいたします。

人類史上、もっとも古い儀礼といわれる葬儀。その長い過程で、次第に儀礼に込められた意味は忘れられ、単なる習慣として行われることも少なくありません。また反対に、宗教的理由のないものが習慣として横行する昨今。今いちど、葬儀について考えてみませんか。

## 葬儀の花

### 花祭壇の登場

葬儀が急激に変化しています。あるいは、すでに「変化してしまった」と言ってもよいかもしれません。どのように変化したのか、「葬儀の花」を例にして考えてみましょう。

葬儀における花とは何であるのか、どんな意味を持っていたのかを述べる前に、ここ5年くらいの間によく見るようになった「花祭壇」に着目してみます。

亡き人の遺影を大きくして荘厳壇中央に安置し、その左右に赤や黄色、ピンクなどの色鮮やかな洋花を曲線的にあしらったデザイン的な荘厳壇、これを花祭壇と呼んでいます。この花祭壇の登場は、「葬儀の花」とは何かという意識と感覚を、決定的に変えてしまいました。

花祭壇が登場する以前の荘厳壇は、白菊あるいは黄菊を半輿などと呼ばれる聖殿風の建物<sup>2</sup>の左右に飾るものでした。しかし、この荘厳壇自体も、昔はなかったものです。荘厳壇の変遷は、昭和初期から昭和30年代に一般的となった、白布を敷いた「白布祭壇」に始まります。やがて、高度成長期になると白布に代わって金欄が掛けられるようになり、次に彫刻が施された板で段を組む、白木の彫刻祭壇になりました。そして、花祭壇の登場となったのです。

### 葬儀のイメージを変えた花祭壇

葬儀の花は、荘厳壇が装飾的になるにしたがって変化していきました。それまで造花であったものを、生花に切り替え大量使用したのは、名古屋の一柳葬具總本店が最初であったといわれています。同店では1937（昭和12）年に「生花部」を新設しており、手桶や籐・青竹といった籠に生花を飾り付ける形式から、白菊・黄菊を多く盛り花にするスタイルへと、荘厳壇にあわせて花の飾り方を変化させました。

このように、装飾のスタイルは変わりましたが、この段階まで、葬儀の部屋は白幕で覆われ、荘厳壇は白木造り、白木の位牌（真宗では本来使用しません）、白の菊、喪主も白の喪服というように、全体的に葬儀は「白」のイメージでした。

しかしながら、現在の花祭壇では、さまざまな花や色が使用されています。故人がバラの花が好きだったということで、バラの花一色で飾ったという事例もあります。花祭壇の登場は、装飾の変化だけでなく、こうした葬儀の「色のイメージ」を完全に変えてしまったのです。



## 「葬儀の花」はシカバナと檜であった

それでは、荘厳壇が登場する以前の花はどうだったのでしょうか。棺を中心とした簡素な荘厳で、出棺動行を済ませると葬列を組んで野辺送りを行い、ムラのサンマイ（三味）で葬場勤行をしていた時代です。

その頃、「葬儀の花」といえばシカバナと檜を意味していました。シカバナは、ご存じの通り釈尊が入滅されたとき、近くに生えていた沙羅双樹の花が一斉に散ったという故事によるものです。竹串などに小さな白い紙を付けたものでしたが、最近は飾られなくなってきています。

一方、檜は、いわゆる枕飾りとして用いられます。卓の上に、檜を生けた白の花瓶と燭台、香炉を置くのが一般的でしょう。少し前までは、これに枕飯が必ず供えられていました。お仏壇の荘厳も切り替えて、打敷を裏返して白、花瓶も生花を止めて檜に代えます。「死」が確認されると、通常の生花を使うものではないという意識があったのでしょうか。このように檜は、葬送の儀式において重要な意味を持っていました。

本願寺第9代実如上人の葬儀を記録した『実如上人闍維中陰録』に、御往生直後、臨終勤行を行うに際して本尊前の荘厳は「花ハ檜ナリ」とあります。葬所から帰って御堂での勤行が終わった後、御亭での荘厳には「花足十二合。銚石ノ三具足。花ハ檜也。御寿像ノウラニ。拾骨ヲオカル。」とありますから、花は檜であったと分かります。

では、なぜ「葬儀の花」が「檜」だったのでしょうか。残念ながら、檜に仏教的な意味や故事来歴はなく、日本人の民俗信仰による「死の作法」としか言いようがありません。

古来、檜は死者の霊を依り憑かせる依代と考えられてきました。正月の歳神を迎え祀る門松、盆のオショロイ様という精霊を迎え祀るホオヅキや、高野檜といった盆花と同じ性格のものと捉えられます。京都では、いまでも墓前に供える花は生花ではなく檜とされており、カミ（神）に供える花が檜であるように、ホトケ（死者）に供える花は檜というのが、一般的だったのです。

## 葬具の世俗化、装飾化

葬儀とは、一人の人間の死に直面して、日常とは異なる時間と空間で執行される葬送の儀礼でした。ですから、葬儀には普段と異なるシカバナや檜といった「葬儀の花」を使って、「日常」ではなく「非日常」であることを表示したのです。しかし、現代の葬儀は仏教的な要素がなくなり、生前の個人らしさを表現する「演出の場」となっています。

美しい花による装飾は、葬具が持つ宗教性を喪失させただけでなく、葬儀自身を世俗化させ、単なるお別れ会にしてしまったのではないのでしょうか。遺体は隠され、「死」が見えなくなる中で、いかに真宗としての葬儀を復権させることができるのか、課題の一つと捉えています。

（委託研究員 蒲池 勢至）

\*本稿は、『宗報』2012年3月号に掲載された記事を、加筆修正したものです。

1. 近年では、生花祭壇と言う場合もあるが、本稿では花祭壇と表記する。
2. 棺を納めて運ぶ輿の名残り。
3. 死花花・四華・紙華とも表記する。

## 喪の色について——白黒の世界

### 白い喪服の伝統

続いては、喪服の色を題材に、葬儀に対するイメージについて、考えてみたいと思います。お葬式を象徴するものの一つに、喪服があります。今日の喪服といえばブラック・フォーマル（黒色洋装）が主流ですが、実は、その歴史は浅く、洋装の導入が始まった明治以降のことに過ぎません。それ以前の日本では、長らく白色喪服の時代が続いていました。

日本における白色喪服の歴史は古く、中国の正史『隋書』倭国伝に、「素服（白布製の喪服）」を着用している様子が記されています。また『日本書紀』には、斉明天皇崩御の際、皇太子であった中大兄皇子が素服を着用したとあり、古代における喪の色は白色と認識されていたことが分かります。ただし、白色といっても現代の漂白した白色とは異なります。麻や藤など植物性繊維を原料としていたことから、厳密に言えば、晒していない白色系統となります。

しかし、この素服は、日本独自のものではありません。当時、東アジア地域の各所で、素服に似た喪服が確認できます。これは、当時の先進国であった中国の喪服に、文化的影響を受けていた周辺諸国が倣ったと考えられています。日本は、八世紀初頭に中国を参考にした喪葬令を定めました。

養老律令喪葬令服錫紵条（718年、757年施行）によれば、天皇は親の喪に際し「錫紵」を着用し、三等以下の親族や諸臣の喪には、「帛衣」（白い練絹衣）を除く、雑多な色を用いたとあります。この錫紵とは、麻の細布をさしており、喪葬令の手本となった唐の皇帝が、錫衰を着ていたことを参考にしたと考えられます。

しかし、ここで事件が起こりました。唐でいう「錫」とは、染色をしていない麻布を指していたのですが、文献のみで学んだ日本人は、それを金属のスズと勘違いし、墨染めにしてしまったのです。こうした勘違いから、天皇の喪服は、白色から一転して墨染め色となり、それが貴族階級にまで伝播したのです。

しかしながら、『万葉集』などには、旧来の白い麻の喪服が登場しています。したがって、当時は、特別な葬儀以外は白い喪服が一般的だったと考えられます。このように、【喪の色＝白】という慣習は脈々と受け継がれ、室町時代には再び、上流階級にも白い喪服が復活しました。もちろん、庶民に至っては、明治時代の洋装文化に触れるまで、白い喪服を着ることが常だったのです。

### 黒色喪服の登場

日本における洋装の歴史は、1872（明治5）年の太政官布告第三七三号において、官人の洋装が義務付けられたことに始まります。しかし、人々が洋装に慣れていないことから、明治時代の国葬では、その都度、官報で「喪服の心得」が示されました。

それによると、皇族以下上流階級の者は、大礼服を着用した上、喪章として黒のネクタイと手袋の着用などが義務付けられました。また、大礼服を持っていない者は、通常礼服に黒い布地で帽帯と左腕章などを付けなければなりませんでした。

そして、1886（明治19）年、女性の洋装喪服が黒色のドレスと定められたことによって、近代日本における喪服＝黒色・洋装という、新たな歴史が始まったのです。

しかし、喪服の完全な洋装化には、時間がかかりました。特に、大正～戦前までは過渡期といえ、明治以前の喪服（白色・和服）を継承しつつも、黒色の影響から次第に、男性は紋付羽織袴、女性は黒紋付に黒帯を着用するようになったのです。

（元研究員 多村 至恩）

## 白色が持つ意味

本願寺第9代実如上<sup>じつじょうにん</sup>人の葬送儀礼<sup>しょうさうぎ</sup>を記した『実如上人<sup>じつじょうにん</sup>閻維中<sup>えんいちゆうじん</sup>陰録<sup>いんりく</sup>』という書があります。そこには、上人の葬儀や中陰の際、人々の装束は「白小袖」であったことが記載されています。通常は「黒小袖」でしたので、葬送中陰にあたってそれとは異なる色の小袖が着用された<sup>3</sup>ことがわかります。

しかし、白小袖は、喪服用の装束というわけではありませんでした。『本願寺作法之次第』第一六五条には、毎月28日の親鸞聖人のご命日（旧暦）に、白小袖が着用されていたことが記されています。11月のご命日法要は、言うまでもなく報恩講<sup>ほうおんこう</sup>です。つまりこの装束は、特別な時に着る“正装”だったのです。

白小袖は、時代が下がると、武士が切腹する時に用いられたり、花嫁衣装の白無垢に姿を変えたりしています。白は、単なる“喪の色”ではありませんでした。

色彩感覚は、時代によって変化します。白色は、平安時代以降、聖なる色・最高の色・中心の色とされ、他の色と隔絶した位置を占めるようになったと言われています。白色がそのように“聖なる色”と観念された時代にあつて、葬儀の際にその色を着用したということは、人の死がどのように受け止められていたのかを端的に物語っています。

すなわち、当時の人々は、葬送儀礼を神聖なものと認識して、最高の色をまとったということです。それによって、亡き人へ最高の敬意を表したということでしょう。

## 黒色の台頭と葬送儀礼の本義

先に述べましたように、明治以降、喪服は黒色になりました。現在ではこれが完全に定着し、それどころか黒服の領域が次第に広がっているように見受けられます。

かつて、葬儀で黒い喪服を着ていたのは、血縁の濃い親族だけでした。手伝いの方は、地味な服に喪章を付けるだけでした。また、通夜に喪服を着ることは、遺族に対して失礼にあたると言われたものでした。これは、通夜は死去の知らせを聞いて急ぎ弔問<sup>ちゆうもん</sup>にかけつける性格のものであることから、平服で、という暗黙<sup>あんもく</sup>の了解があつたからです。

ところが今では、土地柄にもよりますが、全体的な傾向として、通夜にも黒い喪服を着る人が多くなり、葬儀の手伝い人も黒服になりました。また、年忌や永代経<sup>えいたいきやう</sup>に参詣する時も黒、という方も増えてきました。

白色が最高の色という平安時代以来の考えが後退し、西洋流のブラック・フォーマルが浸透してきたということですが、重要なのは、その色がフォーマルな色・高貴な色であるという感覚を人々が有しているかどうか、でしょう。

単に、黒服だとあれこれ考えなくてもいいから楽だ、というのでは、葬送儀礼の持つ意味といったものが見えなくなってしまう。また、黒という色は、暗闇とか不吉を連想させる色でもありますので、葬儀をそうした感覚で捉えてしまう危険性をはらんでいるようにも思われます。

【喪の色＝黒】となった現在、人の死をどのようなものと観念するのか、ということが問われてくるのだと思います。

(委託研究員 山田 雅教)

\*本稿は、『宗報』2012年7月号に掲載された記事を、加筆修正したものです。

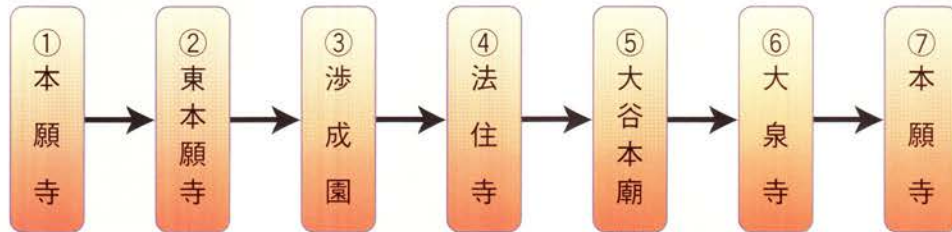
1. 現在、僧侶の喪服といえば、鈍色<sup>にびいろ</sup>（濃い灰色）の装束ですが、この色はここを源流としています。
2. 「閻維」はパーリ語ジャーベータの音写で、一般的には「荼毘<sup>たひ</sup>」と訳されます。
3. この上に、直綴<sup>じきとつ</sup>（腰のあたりから裳のある裾が付けられている衣）や裳付衣<sup>もつけころも</sup>（親鸞聖人の鏡御影を参照してください）といった法衣<sup>ほうい</sup>を着用しました。

# 行ってきました“親鸞さまの道”

親鸞聖人のご生涯はどのようなものであったのか、その追体験を目的として開催している「一緒に歩こう“親鸞さまの道”」ツアーは、開催のたびに定員を上回る応募を頂いてきました。参加できなかった方々にも歩いていただければと考え、前回（第3回）に引き続き実施した「帰洛後の親鸞聖人編」（2011年11月28日実施）と「親鸞聖人ご誕生編」（2012年11月18日実施）について、ご紹介します。

## 帰洛後の親鸞聖人編

帰洛後の親鸞聖人にまつわるご旧蹟を中心に、本山界隈から東山方面を徒歩で巡るコースです。



缶バッジ

### ■ツアーの様子

まず訪れたのは東本願寺。当日はちょうど七百五十回御正當報恩講の最中でした。有名な坂東節の声明が行われ、境内は人であふれ熱気に包まれていました。その後、涉成園を経て正面通りを東へ進み、三十三間堂向かいの法住寺にて、親鸞聖人そば喰い木像にお参りしました。前回ツアーで参拝した延暦寺大乘院のそば喰い木像とまた違ったお姿のようでした。



聖人御自作と伝わる「そば喰い木像」がある法住寺

午後からは、大谷本廟で蒲池勢至委託研究員から大谷墓地に関する解説を聞き、親鸞聖人茶毘所へお参りしました。さらに、紅葉見物の人々で賑わう清水坂を通り、今度は一路西へ。聖人が晩年を過ごされた「花園御所」跡と伝わる大泉寺（浄土宗）では、茶菓子とざくろの接待を頂きました。朝から歩き通しで疲れを感じていたところで、ほっと一息つくことができました。その後、本願寺聞法会館に到着し解散となりました。

### ■参加者の声—当日のアンケートから—

- ・東本願寺などご縁がないと思っていましたが、今回訪問でき参加した事を嬉しく思います。（70代・男性）
- ・毎回解説が聞けて（知らない事も有り）為になります。蓮如様のご旧蹟も含めて範囲を広げて頂いてもと思います。（60代・男性）
- ・京都でもあまり知らないお寺を巡り、お参りが出来てよかった。（60代・女性）

### ■ツアーを終えて

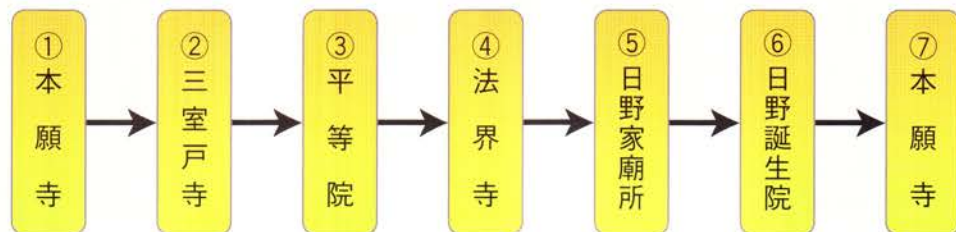
晩秋の京都を東西に横断した今回のツアーでは、本山から歩ける範囲にも様々なご旧蹟があることが実感されました。また、当初心配された天気も快方へ向かい、気持ちよく歩くことができました。

（委託研究員 大田 壮一郎）



## 親鸞聖人ご誕生編

モデルコース1（本書14～15ページ参照）を参考に設定した浄土信仰と親鸞聖人の「ふるさと」、宇治・日野を徒歩とバスで巡るコースです。



缶バッジ

### ■ツアーの様子

最初の訪問地は、三室戸寺みむろとじです。当寺の本堂脇には、親鸞聖人の父・日野有範ゆかりの「四十八願寺」の額がかかった阿弥陀堂があります。早速、堂前にて同行解説員の大田壮一郎さんに解説していただきました。続いて、宇治を一望するため、山道を歩いて仏徳山展望台へ。下山の後は、昼食をはさんで平



仏徳山を登る参加者たち

安浄土教の旧蹟として知られる平等院を訪ねました。残念ながら、鳳凰堂ほうおうどう（阿弥陀堂）は大修理のため、拝観することができませんでした。しかし、隣接する博物館において、初めて一般公開された日想観にんそうかん（『仏説観無量寿経』に説かれる阿弥陀如来の極楽浄土を想い描くための観法）の姿を描いた鳳凰堂の扉絵を拝観することができ、浄土信仰の深遠な世界に浸らせていただきました。

その後、バスに乗ってよいよ親鸞聖人ご誕生の地である日野へ。まずは親鸞聖人のご誕生にまつわるご旧蹟「ゑな塚うぶづか」、「産湯の井戸」を拝観。次いで、ご実家・日野家の菩提寺である法界寺を訪問しました。当寺では、親鸞聖人もお参りされたであろう阿弥陀如来坐像の仏前において、ご住職より解説していただきました。解説の後は、常行三昧じょうぎょうさんまいを模して、参加者の皆さんと共に阿弥陀如来坐像の周囲をぐる

りと歩かせていただきました。その後は、日野家の廟所に足を運び、日野有範の墓と伝えられる五輪塔などを見学。最後に日野誕生院（本書2ページ参照）を訪れ、同行布教使による法話ののち、本堂においてお勤めをさせていただきました。

### ■参加者の声—当日のアンケートから—

- ・仏徳山からの眺望、大変興味深く、とても有難いコースでありました。（80代・男性）
- ・ご誕生の地、幼少の頃がとても偲ばれました。（60代・女性）
- ・誕生院で頂いたご法話は、とても心にひびきました。ここをお念仏のスタートと、心をあらたに、聴聞に勤めたいと思います。（60代・女性）

### ■ツアーを終えて

今回は山道を含むやや健脚向きのコースでしたが、参加者の皆さんは疲れを忘れ、各ご旧蹟に魅入っていました。親鸞聖人がお生まれになった頃の浄土信仰の様相を垣間見ていただけたのではないのでしょうか。

（研究助手 渡邊 勇祐）



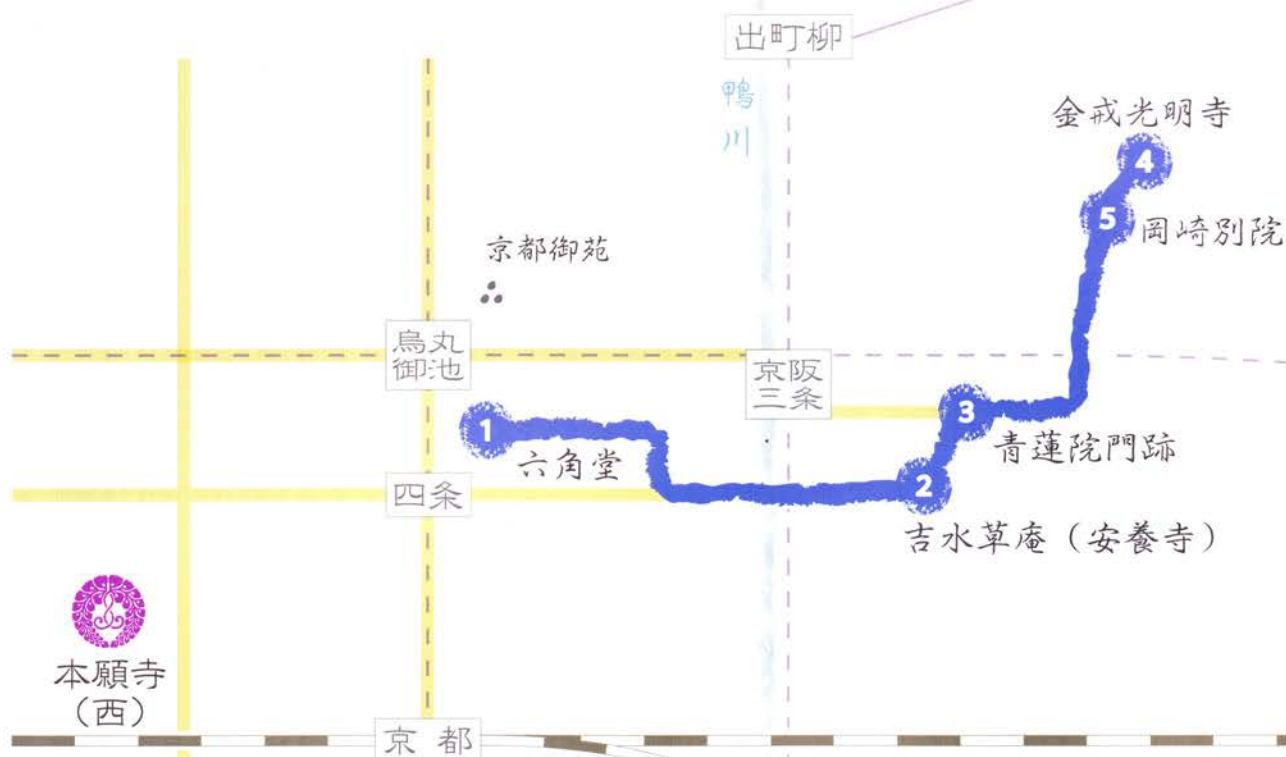
# 親鸞さまの道

一緒に歩こう



仏教音楽・儀礼研究室では、宗教に欠かせない儀礼の「身体性」に鑑み、親鸞聖人が歩まれたであろう「道」を念頭においた新たな巡拝のカタチを提案しています。これまでに、モデルコースとして、4つの道を設定してきました。実際に歩く=体感することを通して、聖人のご生涯に思いを馳せ、新たな気持ちでみ教えをいただいてみませんか。

※詳細なルートとご旧蹟の概要については、当研究室 Web サイト (<http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/>) の「行ってきました“親鸞さまの道”」をご参照ください。

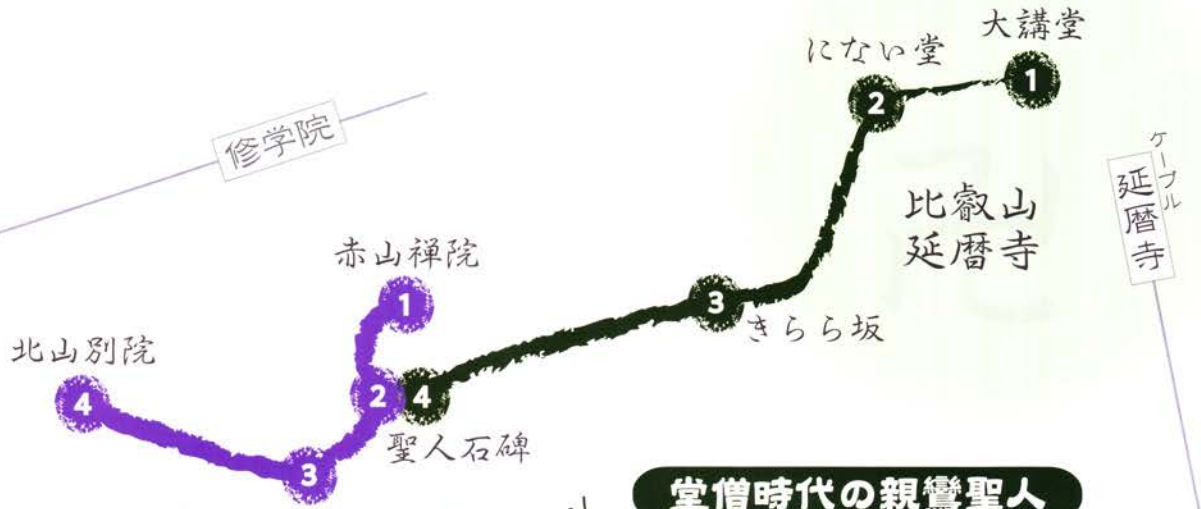


コース4

## 吉水時代のご旧蹟と念仏道場

約5時間 平坦な道

- ① 六角堂 救世観音(聖徳太子)夢告の地
- ② 吉水草庵 師源空聖人[法然坊]との出遇いの地
- ③ 青蓮院門跡 親鸞聖人お得度の地
- ④ 金戒光明寺 源空聖人開基の念仏道場
- ⑤ 岡崎別院 親鸞聖人の草庵跡



- ① 赤山禅院 玉日姫伝承の地
- ② 聖人石碑 篤信門徒建立の碑
- ③ 曼殊院門跡 天台宗門跡
- ④ 北山別院 親鸞聖人ご休息の地

### 堂僧時代の親鸞聖人

約5時間 山道を含む

- ① 大講堂 学問修行の中心地
- ② にない堂 堂僧・親鸞聖人ご修行の地
- ③ きらら坂 六角堂参籠にまつわるご旧蹟
- ④ 聖人石碑 篤信門徒建立の碑

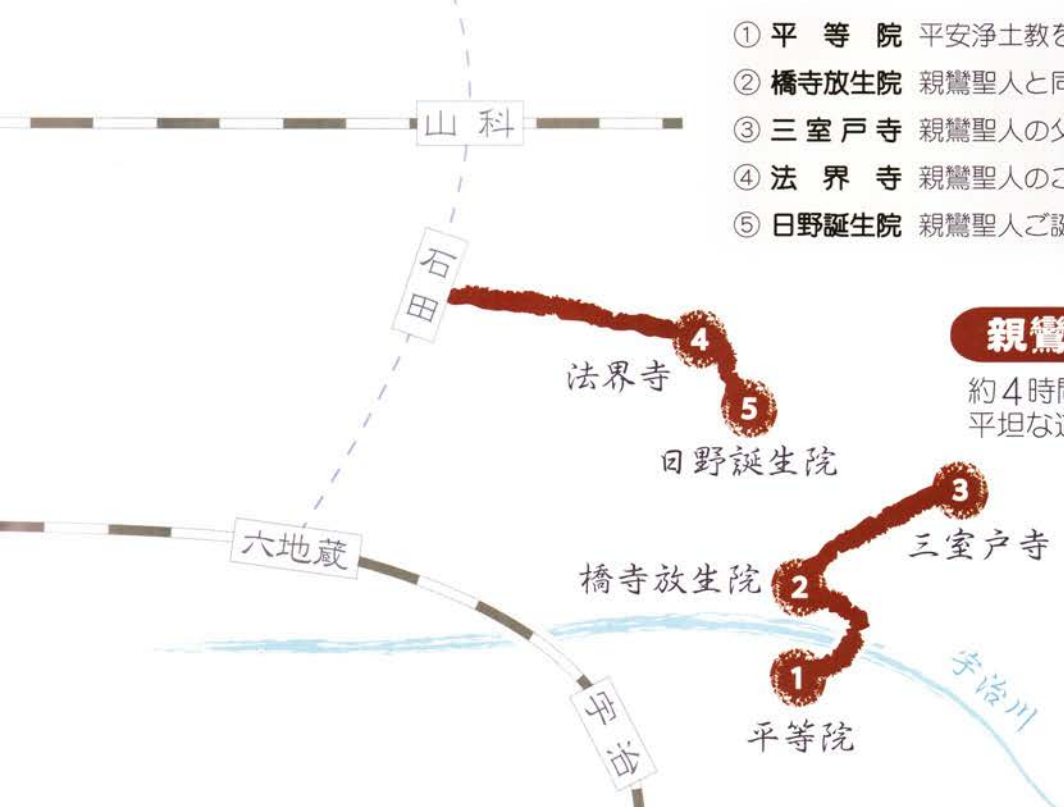
### 山を下りる親鸞聖人

約3時間 平坦な道

- ① 平等院 平安浄土教を代表する寺院建築
- ② 橋寺放生院 親鸞聖人と同時代に活躍した叡尊の旧蹟
- ③ 三室戸寺 親鸞聖人の父・日野有範隠棲の地
- ④ 法界寺 親鸞聖人のご実家・日野家の氏寺
- ⑤ 日野誕生院 親鸞聖人ご誕生にまつわるご旧蹟

### 親鸞聖人ご誕生まで

約4時間(電車・バス移動を含む)  
平坦な道と緩やかな登り



※本マップは、当研究室編のガイドブック『一緒に歩こう“親鸞さまの道”』に掲載のルートを基に作成したものです。

# 研究室だより

## 研究活動の紹介 — リーフレット 年中行事

仏教音楽・儀礼研究室では、真宗儀礼をより身近に感じて頂けるよう、その歴史や意味などを分かりやすく解説したリーフレットをお届けしています。当研究室のウェブサイト（下記参照）からPDFファイルがダウンロード可能です。A4・両面カラー印刷をおすすめします。ぜひご活用ください。

歴史とお墓まいりについて



歴史と功德について



歴史と新年の迎え方



歴史とご恩について



歴史とお念仏について



# 仏教儀礼

浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室 ニュースレター 第15号

発行日：2013（平成25）年3月

編集：浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室

発行者：浄土真宗本願寺派総合研究所 所長 佐々木恵精

〒600-8349 京都市下京区堺町92番地 伝道第三本部内

Tel.: 075-371-9244 Fax.: 075-371-5761

<http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/>

頒 価：無料

協力・写真提供：本願寺出版社